（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　鈴木　啓太

本論文は、課題に取り組む学習者がモチベーションを高めて成果を挙げるにはいかなる能力観・信念を持つことが有効かという問いを、課題の選択に関わる諸要因と関連づけて検討したものである。能力の可変性について人々が抱く素朴信念は「暗黙理論」と呼ばれ、能力は生得的で不変だと考える実体理論と、努力によって向上すると考える増加理論に大別される。従来の暗黙理論研究では、学習上の困難を乗り越えるには増加理論を持つことが望ましいとされてきたが、本論文では、学習・教育環境によって有効な暗黙理論は異なるという独自の視点から、課題の選択肢の有無や選択の自由度に応じた増加・実体理論の特質と有効性を明らかにすることが目指される。

論文構成は、研究の課題と目的および論文構成を示した理論編、実証編第 1～3 部、総合考察から成る。実証編第 1 部では二つの実験室実験を通じて、課題に複数の選択肢が存在する状況下で学習者が暗黙理論に応じて異なる学習方略を採ることを明らかにする。具体的には、学習者が実体理論的であるほど、課題の難易度を見極め自らに適した課題を選んで成果を挙げようとするのに対し、増加理論的であるほど、難易度に関わらず最初に取り組んだ課題に努力を注いで熟達を図ることが示される。第 2 部では二つのシナリオ実験によって、上述の学習方略に対応する努力観の差異（努力を適性判断のための情報として捉える実体理論的な努力観と、能力向上のための資源として捉える増加理論的な努力観）が示される。これらの知見は、課題選択の余地がある状況では最適な課題を選び取ろうとする実体理論者の特質が活かされる一方、増加理論者が特定の課題に固執して最善の成果を挙げる機会を逸する可能性があることを示唆している。第 3 部では課題選択に関わる諸要因を現実の学習場面に即して捉え直し、学校の教育環境と暗黙理論、学業成績、学校生活満足度の関係を社会調査によって検証することで、知見の生態学的妥当性を確認する。一連の結果を踏まえ、総合考察では、先行研究と本研究の知見を統合的に理解する枠組みとして課題選択の自由度という環境要因に着目することの重要性が主張されるとともに、特定の環境下で学習経験を積み重ねることで特定の暗黙理論が獲得される可能性について、比較文化研究の視点を踏まえた議論が展開される。

本論文は、主要概念に関わる論述に甘さが残ること、環境要因と暗黙理論の関係を力学モデルとして明確に表現できていないこと、暗黙理論の獲得過程の探究に向けた考察が不十分であること等、複数の課題を残している。しかし、先行研究とは異なる視点で学習者が置かれた環境に目を向けることの重要性を示した点、暗黙理論の獲得過程の解明という未開拓の研究領域に一石を投じた点には、高い独創性と学術的価値が認められる。よって、審査委員会は本論文が博士（社会心理学）の学位に値するとの結論に達した。